

6 ブレイクばあさんとハリー・ギル

実話

おお どうした どうした  
何が若いハリー・ギルを苦しめてるのか  
ハリーの歯は ずっとカチカチ鳴っている  
カチカチカチカチ ずっと  
ハリーはチョッキをぴっちり着こみ 5  
グレーのラシャ地もフラノ地も上から重ね  
背中にはブランケットとコートを  
三人分は着込んでいる

三月も 十二月も 七月も  
ハリー・ギルには同じこと 10  
近所の人たちもみんな噂している  
ハリーの歯は ずっとカチカチ鳴っている  
夜も 朝も 昼も  
ハリー・ギルには同じこと  
太陽の<sup>もと</sup>下でも 月の<sup>もと</sup>下でも 15  
ハリーの歯は ずっとカチカチ鳴っている

若いハリーは頑健な牛追い  
ハリーほど頑丈な四肢<sup>からだ</sup>を持つ者がいるだろうか  
赤詰草<sup>あかつめくさ</sup>のような頬に  
三人分の太い声 20  
ブレイクばあさんはよぼよぼの貧乏人  
食べ物もなく 着る物もなく  
その戸口の前を通れば誰だって  
いかに貧しい家か わかるはず

一日中 彼女は粗末な小屋で糸を紡いだ 25  
夜も三時間働いたのに  
ああ 身を粉にして働いた甲斐もなく  
爪に火をともしような貧乏暮らし  
彼女はドーセットで暮らしていた  
小屋は冷たい風の吹く丘に立っていた 30

その地で石炭は貴重品  
はるばる海を渡ってやって来る

同じかまどの火でスープを煮て  
ふつうは二人の老婆が  
小さな家で一緒に助け合って暮らすもの 35  
でも あの貧しいばあさんはたった一人で暮らしていた  
夏の間はまだましで  
日が長く 暖かく 明るい夏の日々  
ブレイクばあさんは戸口に腰かけて  
陽気な小鳥のように話しかけてきたりした 40

でも川が凍りつく頃は  
おお ばあさんの骨はその髓まで冷え切った  
もしも彼女に会ったら あなたはきつと言ったでしょう  
ブレイクばあさんには大変厳しい季節だと  
夜は気が遠くなるほど冷たくて 45  
お分かりでしょう とても寒く冷たい寝床は  
ひどく惨めなもの  
冷たい寝床ではほんの一睡もできなかったはず

そんな冬でも彼女にとって嬉しいときもあるので  
夜に風がヒューヒュー吹き荒<sup>すさ</sup>び 50  
たくさんの若枝や枯れ枝を  
そこら中に撒き散らしてくれるから  
彼女を知る人たちが言うには  
元気であろうがなかろうが  
たった三日寒さを<sup>しの</sup>凌げるだけの薪すら 55  
準備できてなかったそうだ

さて 霜がずっと続くとき  
老いた手足が<sup>うず</sup>疼くとき  
ブレイクばあさんには古い生け垣ほど  
魅力的なものがあるだろうか 60  
実を申せば 時々  
老いた手足が寒くて凍えるときにだけ  
彼女は自分の火も寝床も放って  
ハリー・ギルの生け垣に一目散

ブレイクばあさんの不法侵入を 65  
ハリーはずっと怪しんでいた  
グディばあさんの悪事をあばいて  
痛い目にあわせてやると誓った  
ハリーは暖かな暖炉の部屋を出て  
何度も畑に通じる道を進み 生け垣へ行った 70  
霜と雪で凍えるばかりの夜も厭わず  
そこで ブレイクばあさんを捕まえようと見張った

ハリーはブレイクばあさんを捕まえようと  
大麦の束の陰に立っていた  
月は真ん丸で煌々と輝いていた 75  
刈り株は霜で凍っていた  
物音が聞こえる 耳を澄ます  
「来たか」ハリーは抜き足差し足 丘を降り  
息を殺して近づく ブレイクばあさんだ  
ハリー・ギルの生け垣にいる 80

ハリーはブレイクばあさんを見つけて喜び勇んだ  
ばあさんは次々と生け垣の枝を引き抜いていた  
ハリーはニワトコの木陰に立って  
エプロンいっぱい枝を抜くまで隠れていた  
ばあさんが枝いっぱいのエプロン抱え 向きを変えて 85  
来た小道を戻ろうとした その時  
ハリーは叫びながら走りだし  
ああ哀れ ブレイクばあさんに跳びかかった

ハリーは猛烈な勢いでばあさんの腕を掴んで  
しっかり取り押さえた 90  
ハリーは猛烈な勢いでばあさんの腕を揺すって  
叫んだ 「ついに捕まえたぞ」  
ブレイクばあさんは何も言えず  
エプロンからは枝の束が落ちた  
その束の上に <sup>ひざまず</sup> 跪き 神様に祈った 95  
全てを裁く神に祈った

ばあさんは祈った 皺だらけの手を掲げて  
その間もハリーはばあさんの腕を掴んでいた  
「神様 いつもお聞きくださる天の神様

どうか この男が二度と暖かい思いができませんように」 100  
ブレイクばあさんの頭上には白々と冷たい月  
ばあさんは <sup>ひざまず</sup> 跪いて祈った  
若いハリーはばあさんの祈りを聞きながら  
氷のような寒さに凍え立ち去った

ハリーは次の日一日中怨みごとを言い続けた 105  
とても寒くて凍えそうだと  
顔は陰鬱 心は悲痛  
ああ ハリー・ギルには人生最悪の日  
その日ハリーは乗馬用のコートを着ていたが  
ちっとも身体が暖まらない 110  
木曜日にはもう一枚  
日曜までには三枚も重ねた

そんなことをしても無駄だった 何枚ブランケットを  
身体に巻きつけても無駄なこと  
ハリーの歯と顎は ずっとカチカチ鳴っている 115  
風で揺れる窓のように  
ハリーの身体は痩せ細り  
もう疑う者などいなかった  
ハリーは生きている限り  
ずっと寒さに震え 二度と暖かい思いはできないと 120

ハリーは誰とも一言も話さなかった  
寝ている時も起きている時も 若者にも老人にも  
ただずっと独り言を繰り返す  
「可哀そうなハリー・ギル 寒くて寒くて死にそうだ」  
寝ている時も起きている時も 夜も昼も 125  
ハリーの歯は ずっとカチカチ鳴っている  
さあ 村人たちよ 忘れるな  
ブレイクばあさんとハリー・ギルのことを

(伊藤真紀訳)